
魔法少女にセクハラなのだ

雑兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女にセクハラなのだ

【Nコード】

N4021Y

【作者名】

雑兵

【あらすじ】

時空管理局員達が職権濫用して、なのは達にエロエロするお話。

フェイトを取り調べるのだ

時空管理局に取っ捕まったフェイトは持ち物を全て没収され簡素なワンピース姿で取調室に通された。そこは一面真っ白で真ん中に机があり大量の書類とカッターされた苺のショートケーキが載っていた。椅子に座っている眼鏡をかけた大柄な男がフェイトを無言で見つめている。

「あ、あの……」

「はじめましてなのだ。ぼくの名前はオリシュなのだ」

「わ、わたしはフェイト……です」

ガシャーン！

男が突然ケーキを皿ごと床に落とした。

「これが君がした事なのだ。意味は解るね？」

「はい……っ、ごめんなさい……っ」

「泣くのは良いことなのだ。まずは罪を償うつもりがあるという誠意を見せるのだ。これを綺麗にするのだ」

「はっ、はい……?!?」

フェイトは部屋を見渡したが掃除用具が見あたらない。

「あ、あの……雑巾とかはどこに……」

「君なのだ」

「へ……?」

「君が床に四つんばいになって口でお掃除するのだ」

「そ、そんな……」

「どうやら罪の意識が足りない様なのだ。それでは君の友達に迷惑がかかるのだ」

「ッ!! まっ! 待ってくださいっ! やります! わたしが掃除します!」

フェイトは膝をつき両手で体を支えるとグシャグシャに崩れたケーキと割れた皿に顔を近づけた。埃のついた苺を唇で咥え、口内で噛

み潰すと酸味が広がった。両目から涙を流しながら生クリームを嘗めとりスポンジを咀嚼する。ツインテール金髪が床に垂れて汚れる。無意識に揺れるお尻が蠱惑的だ。皿の欠片でどこかが切れ鉄の味が甘味に混ざる。床を何度かペロペロ舐めてピカピカにし割れた皿を歯で啜えて重ねた。

「よくできたのだ」

上からの言葉に顔を上げるといつの間にか男は目の前に立っていた。見上げるフェイトの頬を涙が流れ口の周りの白いものと交じって顎から落ちる様は凄艶だった。男はフェイトの頭を撫でつつ微笑みを浮かべて優しく語りかける。

「君の誠意は伝わったのだ。これからは時空管理局の為に働いてもらうのだ」

「はい……」

「次は体を綺麗にするのだ」

「はい……えっ！？きゃっ！？」

男は右腕をフェイトの膝の裏、左腕をフェイトの肩に回してお姫様抱っこをした。

「あ、あのっ……」

「お風呂場まで連れていくのだ」

「ひ、一人で歩けますからっ」

「気にしないでいいのだ」

フェイトは左手で男の服を摘まんだ。男の早い鼓動が聴こえた。

「ぼくも緊張してるのだ。君みたいな可愛い子の相手をして」

フェイトの顔が紅くなった。

フェイトをお風呂に入れるのだ（前書き）

お漏らしの描写があります。といっても、単語だけですが。

フェイトをお風呂に入れるのだ

ポチャーンッ！

「ゴボツ？！ガボガボゴボツ……がはあっ！」

フェイトはお姫様抱っこでお風呂場に連れてこられ、そのまま湯船に放り投げ込まれた。頭の天辺から足の先までお湯に沈み、手足をバタバタ藻掻かせてなんとか湯船の縁にしがみついて顔を出す。

「げほっ……はあっ、はあっ、はあっ……きゃっ！」

濡れた髪が張りついたままの顔で男を見上げると既に全裸だった。毛深い裸身が網膜に焼き付く。大きな右手でツインテールの左側を掴まれ無理矢理立ち上がらせられた。薄い生地が素肌に貼り付き少女のボディラインを浮き上がらせている。

「早く脱ぐのだ」

「ツツ！……は、はい……」

フェイトは腕を交差させて裾を掴むと一気にワンピースを脱いだ。はいてない。

「白くて綺麗な体なのだ」

「えっ！？……あ、ありがとうございます……」

男がワンピースを自分の服の上に重ねて置きフェイトを褒めるとフェイトはお湯に温められてピンクになっていた全身を更に紅く染め俯き両腕でおっぱいとお股を隠した。

「洗うからこっちに来るのだ」

「痛っ！髪っ、引っ張らないでえっ」

男は椅子に座るとフェイトを膝の上に乗せた。石鹸を泡立てフェイトの足裏に指を這わす。

「ひゃんッ！」

可笑しな声をあげてしまいフェイトは両手で口を塞いだ。

「可愛い声だけど大声は迷惑なのだ」

フェイトは目を瞑ったままコクコク頷いた。だが男が足裏を洗い出

すと背筋を反らして体をピクピクさせ真っ赤に熟れた幼貌から声が漏れる。

「ふうっ……んうッ！んっんっんっ、むふ……」

「終わったのだ」

「ふわ……」

「次は反対の足なのだ」

「ひゃいんッ！いやッ、あんッ！」

「動くと洗いにくいのだ」

男は固く丸まった爪先を挟み開け指の間を洗っていく。その度にフェイトは震え跳ねた。

「やあッ！ダメっ！ひゃううッ！！」

そんな調子だから他の場所を洗われてく内にフェイトはすっかり疲れスベスベの背中を男の胸に預けて湯だった様に桜色に紅潮した体全体を使つて荒い吐息を繰り返し口の端から涎を垂らしていた。

「さ、後は湯船で温まるのだ」

「へっ……？」

いつの間にかフェイトは全身を洗われていた。穴という穴をそれぞれそこそこの穴に至るまで洗われた。男に手首を掴まれ湯船に連れていかれる時ツインテールをほどかれた髪の間から壁に備え付けの鏡を見るとフェイトは自分の表情が妙に大人びている事に驚いた。湯船の中では目を合わせたまま一番敏感な臍を弄くられて失禁した。

フェイトとお医者さんごっこなのだ

「ごめつ、ごえんあさい……ひつ、うぐう……」

フェイトは医務室のベッドの上で非礼を詫びていた。髪はリボンでツインテールにし、ナイトドレスを着ている。男が頭を撫でると首がすわってない赤ん坊の様にあっちこちに頭が揺れ、肩紐が片っ方二の腕に落ちてている。

「もう謝らなくていいのだ。フェイトは泣き顔も可愛いけど今はフェイトの笑顔が見たいのだ」

「あつ……へ、えへへ……」

フェイトは泣き腫らした顔に精一杯の笑顔を浮かべた。ちょっと引きつってる。

「よしよし。フェイトは可愛くていい子なのだ」

「えへえへ……」

「お薬をつけるからお口を開けるのだ」

「あーん」

男は白い軟膏を指先に取り最初に唇に塗ると舌や頬の内側、歯茎や硬口蓋に塗った。

「舌の裏側に塗るから舌を上げるのだ」

「んあー……ふやあつ！」

「動くと塗りにくいのだ」

「ひあひい……んつ、あつ」

「次は口の底なのだ」

「うあ、ああ……」

男はぬかるんだ泥の様に柔らかい場所を押し込む様に薬を塗り込み舌の根元にも塗り残しが無いように執拗に指を這わせた。フェイトの口の中は真っ白な物に覆われた。

「これは食べる薬だから呑み込んでも平気なのだ」

フェイトは口内に溜まっていた唾をゴクンと飲み込んだ。

「んあ、苦いんですね……」

「良薬口に苦しなのだ。ペロペロ」

「ん？あ……な、何を……」

男はフェイトの唾液でふやけた指を舐めていた。フェイトの顔は火が出そうな程紅くなっている。

「薬が勿体無いのだ」

「で、でもお……」

フェイトはナイトドレスの裾をキュツと両手で掴み顔を俯かせセチラと男の指を視ている。男がフェイトの両肩を掴んだ。

「フェイト」

「ひゃっ！は、はいっ！」

「よかつたら、ぼくがフェイトを引き取るのだ」

「えっ……?!」

「ぼくは一人暮らしだし、フェイトみたいな可愛い子が来てくれたら嬉しいのだ」

「いつ、いいんですか……?」

「無理強いはしないのだ」

男がベッドから立ち上がると、男の掌からフェイトの両肩に伝わっていた温もりが急速に失われ、素肌を剥き出しの肩はあっという間に冷えていく。

「待つ！待ってください！……お願いします……一緒に、居てください……」

「勿論大歓迎なのだ」

男は両手をフェイトの背中に回して強く抱き締めた。フェイトの目から涙が零れる。

「ああ……ありがとうございます。……お父様、って呼んでもいいですか？」

「勿論」

「おとうさま……」

「そうと決まったら、アルフを呼んでくるのだ」

「え？あ、はい……」

フェイトは、アルフの事をすっかり忘れていた自分にビックリした。
「さ、それまでゆっくり休むのだ」

男はフェイトのナイトドレスの肩紐を直すとベッドに寝かせ、ふにふにと柔らかな左頬を撫でながらやっぱりふにふにと柔らかい右頬にキスをした。

「あんっ」

「おやすみなさいなのだ」

「はい……おやすみなさい、お父様」

医務室から出ると、腰のポッケに両手を突っ込んだ鷲鼻の男が壁に寄り掛かっていた。

「よお、オリシュ」

「マルキ」

マルキと呼ばれた男は、アルフの取り調べを担当した者である。

「アルフはどうなったのだ？」

「問題無し。活きのいい喋る犬ってなあ堪んねえな。逐一現時点の感情を教えてくれるからよお。恐怖と殺意の入り交じったあの目を思い出すだけで俺あ……」

「涎涎」

「おっ、とと……。で、そっちの生き人形はどうなりたい？」

「こつちも問題無しなのだ。少なくとも外見は本物の少女と同じ。」

ケーキ・浴槽の湯・石鹸・シャンプー・リンス・軟膏に混ぜた薬剤の効き方も多少過敏だけど個人差の範囲なのだ」

「そうかいそうかい。アルフもお前家でいいんだよな？」

「うん。今行くところだったのだ。ところで、手をどうかしたの？」

「あ、ああ。ちよつとばかり、やりすぎちまってな……。せつかくだ。おめえが薬塗ってくれよ」

「両手が腫れるまでお尻ペンペンしたのかい？やれやれ……」

オリシュはマルキとともに、医務室へと戻ったのだった。

取調終了

はやてをメイドにするのだ

はやてはヴォルケンリッターの減刑の為にメイドとして働いている。朝食を作って男の寝室を訪ね起こす。

「ご主人様、朝です」

「ん、おはよう。はやてみたいな美少女に起こされるのは堪らん」男はベッドで上半身を起こし舐める様にはやての全身を視る。はやてはデザインは古風だがスカート丈が極端に短いメイド服を着させられ「歩かないから」と靴や靴下の着用を禁止された。当然の様に脚にブラケット等をかけるのも禁止されはやては常に爪先から太股まで生足を晒している状態だ。手を組んでいなければスカートの中が見えてしまう。パンツやから恥ずかしい。

「はやて。足」

「は、い……」

男の命令ではやては自分の片足を持ち上げ男のいるベッドに載せた。その時どうしてもスカートが捲れるのを二人とも知っており男はやけ、はやては赤面した。

「はやての足は今日もスベスベで絹の様だ」

「ど、どうも……」

男がいやらしく脹ら脛を撫で回し膝や膕、太股へと次第に上っていく。男の手付きは巧みで幼いはやては翻弄されるしかなかった。必死に目を瞑り横を向くが声は我慢できない。

「は……あつ、んうっ！」

「エッチな声だな」

「そっ、そんなと違っクヒヤッやぁん……！」

「だろうな。はやてはまだ子供だものな。ただ気持ちいいだけだろう？」

「はっ、はい……！あううんっ！」

「ではここまでだ」

「あつ……、はい……」

はやては続きを催促したい気持ちや触られてない脚の疼きを気力で
擦じ伏せた。

「飯」

「……はい」

はやてはスープを掬うと自分の口に含んだ。すると男ははやての顎
を掴みその口を吸った。はやてがスープを男の口内に送ると男から
は、起きてから嗽もしてないせいでねばついてる唾液が臭い口臭と
ともに流し込まれる。更に舌まで入ってきて粘膜をこそげ落とす様
な強さで口中舐め回されはやての舌にも絡み付き扱ってくる。

「んう！？んっ、んっ、んふう……ッ！」

男に両耳を手で塞がれ、口の中の音や触感をより一層意識させられ
るはやて。男が口を離れた時には名残を惜しむかの様に舌を突き出
し慌てて引つ込めた。

「ククッ、やはりはやては淫乱だな」

「ちゃ、ちゃいますっ！今のふぁ、くふうう……」

男の指が耳の裏や首に触れるだけで甘えた声音になってしまう。男
ははやてをベッドに移し扉の外に待機していた男達——はやての同
僚——を呼んだ。

はやてはこれは仕事、仕方無いと言い聞かせ、期待している自分か
ら目を背けた。

なのはとVを観るのだ

上司に呼び出されたなのはは、フェイトやはやてが大勢の男とエッチしてる映像を見せられている。もちろん股間にはモザイク。

「な、何なんですか……これ」

「見ての通り、犯罪の証拠さ」

「この人達はもう捕まえたんですかつ!？」

「ん？捕まつてる様に見えるか？」

「え？……あつ」

顔が熱くなるのを我慢しながら確認すると、目の前の上司もその非道に参加していた。

「どつ……どういう事ですか」

「これは奴らの犯罪の証拠という事さ。体を売って出世するなんてとんでもない奴らだな。流石元極悪犯」

「二人とも実力です!」

「これを見て、誰が信じる？」

確かに二人とも逃げたり抵抗はしていない。だが裏がある筈だ。現にフェイトは養父に助けを求めている。

「君が動けばこれらがばら蒔かれるぞ？」

「くつ……」

男は右手をなのはの右肩にやり抱き寄せた。そのまま右腕を摩り、ジャケットの裾から手を入れて腹を撫で始めた。

「やつ、やめ、ウンツ!」

「おつ、ここがいいのか？」

なのはが反応したのは昔瀕死の重傷を負った箇所だった。傷痕は残らなかったが、周りの皮膚より鋭敏になっていた。腕の中で震えながら耳まで真っ赤にしているなのはに気を好くした男はYシャツをスカートから出し直に指の腹で敏感な素肌を愛撫しだした。それは、まだ誰にも肌を許した事の無いなのはに堪えられるものでは無かつ

た。

「あつ！やつ！はう……ああんツ！」

黒革のソファーをギチギチ鳴らしながら悶えるなのは右手に男は左手の指を絡ませキスした。シヨックを受ける暇も無く舌を舌で絡めとられ、唾液を流し込まれ、反対に唾液をジュルジュルズズと啜られ、傷跡を指が這うピリピリした心地好さとも連動させられ、なのははお腹を波打たせながら喘いだ。

「ん、むっ、ちゅぱっ……ひやつ、やんツ！んんッ！じゅぶじゅっ、はっ！あつ！あん、んんッ！やあッ！」

息を荒らげ力の抜けたなのはを立たせ、男は普段自分が仕事に使っている机なのはの上半身を俯せにした。胸が潰れて苦しいが背中を押さえ付けられ起き上がれない。男は今度は下半身をまさぐってきた。

「ふあッ！にやッ！ああ、あんっ！やああッ！」

「ひひひっ、流石はエースだ。いい尻してやがるぜ。そろそろ脱がすかあっ」

仰向けにされたなのはは抵抗するが、

「やつ、やめ……ヤアーツ！！！」

ビリッと勢いよく破れるYシャツ。その下から現れたブラジャーも引きちぎられた。

「やあなのオっ！」

ヴィヴィオとキャロで遊ぶのだ

その日は偶々キャロが一人でヴィヴィオの世話をしていた。

そこに局員達が押し掛け、ビニールプールで遊ぶ事になった。

男達は手早く素っ裸になり二人の着替えを手伝い始めた。キャロは遠慮したが押しきられヴィヴィオ共々されるがままに委せた。徐々に露になる柔肌に男達の気分は高揚するが二人は気づかず、男女の体の違いをヴィヴィオは触って面白がり、キャロは興味深げに見つめていた。

二人の裸体を十二分に観賞した男達は、白のスクール水着を渡した。

ヴィヴィオは床に座って小っちゃな両足を通してから立ち上がり、脚の付け根から水着を引っ張ってサラサラとした質感のお尻、ポツコリ烏賊腹、超平面な胸と引き上げ、肩紐を肩の上まで持ち上げて指から入れた。

キャロは立つたまま前屈みになり、膝を曲げ足首を伸ばして片足ずつ通し、脛から第二次性徴前の胸の下まで上げて、肘から肩紐を通した。

一人で特大ビニールプールを膨らませ酸欠になった男は「見るよ。二人の美少女が……俺が膨らませたプールではしゃいでいる。つまり……俺の吐息に包まれて微笑んでるんだ。こんなに素敵な事が……あるかい？ガクっ……」と大変満足そうな表情で気を失った。

こうして、愛すべきバカが樂園から一名脱落。

二人とも、ビニールプールの中で泳ぎながら触っても気づかないのか気にしないのか全く照れない。男達は調子に乗って揉んだり食い込ませたり水着の中に手等を入れたりとやりたい放題。ヴィヴィオもゾウさん達で遊び始めた。

途中で肩紐が一本ずつ切れた時は、キャロがポロリを隠そうともせずに謝る姿に感涙。これ以上壊すと悪いからと、二人も全裸に。

二人が着ていた水着はグシヨグシヨのまま保管され、後日オークションに出品。高値で落札された。

しかし、こんなに楽しい時間が長続きする筈も無く……。時間を忘れて楽しんでいたら、なのはママの帰宅時間も忘れてました。

「ただいま」

「……………ッ!!」「……………」

男達の時が凍りつく。

「ちよつと……頭冷やそうか」

なのはの こうげき ！

全力全開スターライトブレイカー！

その場にいた時空管理局局員達全員にオーバーキル！もちろんキヤロも捲き込まれた。

この件により、なのはシンドロームの発症者が大量発生。

ショック療法として、なのはへのお仕置きは彼らがする事になった。

今日も異次元は平和です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4021y/>

魔法少女にセクハラなのだ

2011年11月26日16時45分発行